

しかし、イエスは黙り続け、何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「おまえはほむべき方の子、メシアなのか」と言った。イエスは言われた。「私がそれである。あなたがたは人の子が力ある方の右に座り／天の雲に乗って来るのを見る。」大祭司は衣を引き裂いて言った。「これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は冒瀆の言葉を聞いた。どう思うか。」一同は、イエスは死刑にすべきだと決議した。（マルコ福音書14章61節～64節）

主イエスは神殿の衛士たちに捕縛された。弟子たちは皆、主イエスを見捨てて闇夜の中に逃げ去った。衛士たちは主イエスを大祭司の館に連行した。イスカリオテのユダの裏切りによって、今夜、主イエスが連行されて来ることは分かっていた。祭司長、長老、律法学者たちで構成される最高法院の議員たちは皆、大祭司の館に集まって来た。ペトロは逃げ去ったけれど、主イエスはどうなるのかと案じ、たき火が焚かれていた中庭に隠れて紛れ込んだ。最高法院の議員たちは、主イエスを何としても、死刑にしたいと思っていた。死刑にするための証言を求めたが、得られず、偽証する者も多かったが、一致しなかった。

主イエスを死刑にしようとしたこの裁判は、最高法院の正式な裁判とは言えない。まず、大祭司の館は私邸であり、真夜中の裁判はあり得ない。律法に基づく正規の裁判ではなく、被告とされた人の人格、行いをあげつらい、集団で苦しめ、蔑む「降格儀礼」と言われるものである。議員たちは、律法に反する裁判であるにもかかわらず、主イエスを死刑にするために、理性を失い暴走したのである。

主イエスを陥れる罪状の証言が得られない時、数人の者たちが立ち上がり、「この男が『私は人の手で造らない別の神殿を建ててみせる』』と言うのを、私たちは聞きました」と偽証した。この偽証も、一致した証言を得ることができなかった。証言が得られないことに焦ってきた大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、「何も答えないのか。この者たちが不利な証言をしているが、どうなのか」と問い質した。しかし、主イエスは黙り続け、何もお答えにならなかった。ますますいらだつ大祭司は、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と問うた。大祭司は最高法院のチェアマンで、自らが質問することはできない立場でありながら、黙する主イエスに憤り、律法に違反して、質問をした。主イエスは、律法違反の大祭司の問いに初めて答えられた。「私がそれである。あなたがたは人の子が力ある方の右に座り／天の雲に乗って来るのを見る。」マルコ福音書は、大祭司の「メシアなのか」という問いに、主イエスは「私がそれである」と答えられたと書いている。そして、人の子が天上の神の右に座る、そして終わりの日の審判者として、天の雲に乗って到来すると、終末時の裁きを告げている。この主イエスの返答を聞いて、大祭司は大げさに衣を引き裂いて、「これでもまだ証人が必要であろうか」と煽った。ユダヤにおいて、自らを神と等しい者とするのは神への冒瀆で、最も重い罪であった。狙い通りの自白を引き出し、最高法院の議員たちは、怒りをたぎらせ、死刑にすべきであると決議した。

ある者は主イエスに唾をかけて侮辱し、ある者は目隠しをして拳で殴りつけ、「言い当ててみよ」と言い合った。主イエスは、彼らの一方的で暴力的な蔑みを黙して受けられた。無法な裁判であったが、最高法院は主イエスに神への冒瀆罪を宣告し、死刑を確定させた。主イエスが現した愛と真実は否定され、彼らの思い通りにことが運んだ訳である。